

講 演

## 私が感動した池田哲学

—その深さと温かなまなざし—

高村 忠成

### 1. はじめに

暑い中、全国各地からたくさんの方が創価大学にお越しいただき、心から感謝申し上げます。特に、私の拙い話をわざわざ聞きにきてくださいましたことに対し、心から深謝いたします。

私は「私が感動した池田哲学」というテーマでお話をさせていただきます。といいますのは、私は学生時代に創価学会の活動に参加するようになり、池田先生の「創価大学をつくる」という話を聞いて、「創価大学の教員にならしていただく」と決意いたしました。そして、創価大学設立準備段階から大学建設にたずさわらせていただき、開学時からは教員として働かせていただきました。さらに今から20年ほど前になりますが、創価大学の学生部長として11年、任に就かせていただきました。こうした経歴のなかで、池田先生から人生の極めて大事なことを、あらゆる角度から教わりました。青年の育成のし方、学生の激励のし方、人生のあり方、世界のものの見方、このような様々な観点からの話を伺いました。私は折にふれ、それぞれの話をメモにとっておきました。

やがて私が晩年になるにしたがって、このまま池田先生の様々な貴重なご指導をメモのままにして死んでしまうのはもったいない、できれば少しでも皆さまに伝えておきたい、と考えるようになりました。こうやって青年を育成するんだよ、こうやって人をみていくんだよ、こうやって物事をなすとげていくんだ、こうやって世界を見ていくんだ、そういう様々な角度からの先生のお話を是非皆さんと共有したい。そういう思いで今回このテーマで話をさせていただきます。

なお、またもう一つこのテーマを選んだ理由は次のようなことです。

これは今から2年ほど前のことです。アメリカの20世紀の教育界で最高峰といわれるジョン・デューイという人物がありますが、そのジョン・デューイの

哲学を残すために「デューイ協会」という組織がアメリカにございます。このデューイ協会の会長が2年ほど前に池田先生と会いいたしました。

ガリソン会長という方ですが、会見の最後にこう言いました。「池田先生が戸田先生と初めて出会ったとき、どのような印象をお持ちでしたか」と。そうしましたら池田先生は戸田先生と初めて会った昭和22年8月14日の夜のこと、それから戸田先生に師事してきたこと、全てを投げ打って戸田先生と歩んでこられたこと、それを約1時間にわたって滔々とガリソン会長に語られたのです。

終わった後、ガリソン会長は感激し、次のように述べました。「池田先生が戸田先生のことを語っておられた時、池田先生の目の輝きは19歳の青年のようなものでした。師匠を語るあの目の輝きがある限り、人間というのは生涯生き生きと躍動できるものです」と。

池田先生はよく言われます。「私は若い日のころから戸田先生のことをいつも語ってきた。「戸田先生はこう言われたんだ」、「戸田先生はこう行動されたんだ」と。こういう戸田先生の話をする同志も一番喜んでくれたし、それが皆の前進の力となってきたんだよ。師匠のことを語れば、その人自身が光ってくる。それを忘れてはならない。」そして、池田先生は次のような歌を詠まれました。「偉大なる恩師のもとで晴れ晴れと、広布に走りて、勝ちたる青春」。私はこの池田先生の姿勢を忘れることができません。師匠のことを語ればその人の生命が輝いてくる、躍動してくる、光ってくる。この「師匠のことを語り継ぐこと」が大事だと思います。

思い返せば、仏教もキリスト教もイスラム教も全て、釈迦やキリストやマホメットが書いたものは何もない。彼らが書いた経典というのは当時はないのです。釈迦もキリストもマホメットもしゃべったことなんです。それを弟子が聞いて、後世に伝え、書き残し、やがてそれが仏教経典、聖書、あるいはコーランとなっていったのです。これを仏教では「如是我聞」というわけです。

また現代の学問的な言葉でいうと、オーラル・ヒストリーになります。オーラルというのは「口頭で」「口述で」という意味です。そしてヒストリー、歴史を語る。オーラル・ヒストリーといいます。この口述されたもの、聞き書き残されたもの、これが歴史的には非常に価値がある。第一級の史料である。こういうことが現在の学問の世界でも言われております。ですから私たちは、大いに師匠のことを語り、大いに師匠の哲学を述べ、そこから様々なことを学び、いろいろな人とそれを共有していきたいと思えます。

そこで本題に入ります。私の話は、前半は、創価大学での学生に対する様々

な先生の接し方、激励、これが前半になります。後半は、青年一般に対するあり方、育成のし方、さらには世界の見方などです。

## 2. 創価大学、創大生に関すること

まず、「創価大学がなぜできたのか」「池田先生は創価大学をなぜ作られたのか」。池田先生のありのままの心情を最初にお話したいと思います。

開学を前にして、池田先生は言われました。「戸田先生が亡くなった時、私は、第三代会長に就任するように周りの幹部の人たちから盛んに勧められたんだ。でも私は断ってきた。それは一つは身体が弱いこと。また、まだ若いこと。そして、大阪事件という裁判を抱えている身であること。こうした三つの理由から私は会長に就任することを断ってきた。でも実はそれらは本当の理由ではなかったんだ。

私にはもっと深い悩みがあった。それは、もし私が会長に就任すればそれなりに創価学会を大きくさせることはできるだろう。でも創価学会を大きくさせたということで、その後はどうするんだ。その答えがなかなか見つからなかった。それでずっと逡巡していたんだ。それがある時、そうだ、大学を作るんだ。恩師戸田先生が言われた大学を作るんだ。そうすれば必ずその大学のなかから私の構想を、戸田先生の理想を受け継いでくれる後輩たちが陸續として現れるに違いない。『そうだ。大学を作ろう』、そう決意をした時に私は第三代会長の任を受けたんだ。そして『創大生が必ず私の理想を受け継いでくれるだろう』、と確信したんだ。私が会長就任の要請を受ける決意をしたことと創価大学を作るということとは一体だったんだ。それほどこの大学を作るということには思いがあったんだ」。

そして、具体的に八王子を大学の土地として選ぶ。このことについて先生は、「この決定についても私はいろいろな思索をした。一つは、根本的には、昭和29年、戸田先生と氷川に行く途中、青梅街道を通った。その時、八王子の方向を指して、あの辺に創価の大城を作りたいな、大学を作りたいな、という戸田先生の示した方向性があったんだ。私はそれをもとにさらに思索を重ねて、よしこの地にしようと思った理由は、以下の点からである。

一つは、自然が豊かなこと。二つは、富士が見えること。三番目は、夕日がきれいなこと。夕日というのは勇者の風格があるんだ。四つに、冬は少し寒い

くらいがいい。アメリカのハーバード大学、イギリスのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、みな寒いところにある。大学の地というのは少し寒いくらいがいいんだ。五つに、都心への交通の便がある程度よいこと。そして最後の決め手は、法華経のなかに八人の智慧をもった王子が世界へ雄飛していくという、「八王子」と、経典のなかにある不思議な言葉と一致していることである。こうしたあらゆる条件を考えて、私は八王子に創価大学を作ると決めたのである。」、こういう話をしてくださいました。実に先生の、深い深い哲学的意図のうえからこの地に創価大学が建っているのです。

開学した時、先生が最初に言われたことは、とにかく「学生を大事にするんだ」「学生第一だよ」との言葉でした。それまでの大学は教授が第一、教授会が第一でした。でも先生は違いました。「学生が第一なんだ」「学生あつての大学である」と。次に、先生は「教育が中心なんだ」と。大学はそれまで研究が中心だと言われていました。もちろん研究はおろそかにしません。でも先生はそれ以上に「教育が大事なんだ」と強調されました。

さらに、凄いと思ったのは、皆さん、2010年8月15日のテレビをご覧になりましたか。タモリの出ていた番組ですけれども、アメリカのハーバード大学とか日本の海陽学園とかの学校の模様を紹介した番組です。

海陽学園は、中高一貫教育、男子全寮制です。そこで徹底的に教育する。海陽学園はトヨタ自動車をはじめ日本のトップ企業がお金を出し合って作った学校です。まだ高校2年生までしかおりません。

そのなかでも最も特徴的と思ったのは、この学校に各トップ企業から20代、30代の若手の優秀な青年を派遣して、生徒に一对一で対話をさせる、ということです。そこで学ぶことの意義、働くことの意味、将来の目標、そういうことを先輩として寮に泊り込んで中高生一人ひとりと話し合っていくんです。これを見た時、私は電撃的ショックを受けました。

池田先生は創価大学が開学したとき、教育が一番、学生が第一、そして三番目に「指導講師制」を設けると言われました。この「指導講師制」というのは、「社会の第一線で働く人が毎週土曜・日曜に寮に泊まりこんで、創大生に対していろいろなアドバイスをし、学問だけではない観点から、社会や世界を見る眼を開かせていく」という制度です。なんと池田先生が40年前に考えたことを、今、海陽学園がやっているんです。

創価大学は池田先生が「指導講師制」を発表した時、何人かの教授が大反対しました。そんなことをすれば学校教育法に違反するとか、学生の教育・指導

は我々教員がやるんだとか、いろんなことを言って。否定したのです。これを聞かれた池田先生は、「わかりました。じゃあ、やめましょう」、といわれました。その代わりに、「教員が好きなようにやればいい」「自分たちでやりなさい」といわれ、「私は入学式をはじめとする学校の公的行事に一切出ない」、こう先生は言われました。実は、創価大学の一期生、二期生の頃、先生が入学式等に来られなかった背後にはそういう理由もあったのです。

指導講師制を、もし40年前のあの時にやっていたらどれほど優秀な学生の芽が出たか。今までも立派な学生が出ましたが、さらに大きな眼をもった、世界への広い視野をもった学生がどれくらい出たか。私は8月15日の海陽学園を紹介するそのテレビ番組を見ていて、池田先生の先見性、卓越性に驚嘆したのです。

それと同時に、創価大学はなんと残念なことをしたんだと、なんて教員は傲慢なんだろうか、なんと創立者の遥かなる遠大な理想を読めなかったのだろうか、そういう気持ちでいっぱいでした。

こういうなかで、先生の姿勢は一貫して「学生第一」、「学生をどこまでも大事にする」でした。

一つ例をあげれば、阪神大震災が1995年1月に起こりました。その時私は学生部長でした。兵庫県出身の学生が約300人おりました。そのうち神戸市出身の学生も100人以上いました。家が全壊した、半壊した、一部壊れた、そういう学生がたくさんおりました。大学の理事会として、可哀想だ、お見舞金を出そう、ということでお見舞金の案が作られました。

家が全壊の人にはいくら、半壊の人にはその半分、一部壊れた人には相当額、というように、3段階に分けて、それぞれお見舞金の額に差をつけた案がたてられました。私その案を作ったんですけれども、それを大学の理事会にかけました。大学の理事会もこれでいいでしょうということになった。最後に、創立者池田先生に御決裁を受けにいきました。するとその時、先生はなんと言われたか。

「家というのは全壊も、半壊も、一部壊れたというのでも、使えないという意味では同じじゃないか。半分壊れたから半分とか、一部壊れたから一部とか、そんなことではない。住んでいる人の身になったら、住めないという意味では全部同じじゃないか。全額同じにしてあげなさい。」こう先生が言われました。

その時私は、ハンマーで頭を打ち割られた気がしました。なんと自分のやっている仕事が官僚的か、事務的か。全部壊れたからいくら、半壊だから半額と

か、一部壊れたから一部とか。しかし現場で苦しんでいる人のことを考えてみれば、皆、壊れた家に住めないという意味では同じなんですね。先生は、「全部同じにしてあげなさい」、こう言われた。実に、上からものを見るのではなく、困難や苦難に遭った人の立場から考えていく。この視点を私は学びました。

またある時、創大生が住んでいるアパートに泥棒が入りました。泥棒が入った部屋ではそれぞれ5万円とか3万円とか1万円とか盗まれてしまいました。5人くらいの学生が夏休みを前に帰省のためにとっておいたお金を盗まれてしまったのです。私は、なにやっているんだ、君たちの戸締りが悪いからこういうことになるんだ、油断だ、という形でその学生たちを注意したのです。それと同時に、創立者池田先生に、こういうことで泥棒が入りまして創大生も被害に遭い、帰省のためのお金を盗まれてしまいました、と報告しました。

先生は、即座に「僕の作った大学に来てくれて、いやな目に遭わせてしまって申し訳ないな。じゃあ、それらの被害に遭った学生に、私の印税から全額貸してあげよう。」、といわれました。

そこで私は早速その5人の学生に、「創立者池田先生が全額貸してくださることになった」「返済はある時払いの催促なしでいいよ」「将来、いつでも返せばいいから」という創立者からの言葉を伝えました。

そうしたところその5人の学生たちは、涙ながらに、「いいえ、そんなことはできません」「これはあくまでも我々の不注意で盗まれたんだから、我々の責任です」「大学や創立者にそこまでご迷惑をおかけするわけにはいきません」「我々は借りるわけにはいきません」、ときっぱり言うのです。私は困ってしまいまして、そのまま創立者池田先生に学生たちの心情をお伝えいたしました。

すると、先生はなんと言われたか。「えらい。嬉しい。その気持ちが尊い。わかった。今度は貸すのではなく全額あげるから、とっておきなさい。これは父から子どもたちへのプレゼントだ。」

こう先生は断言されたのです。私は早速、学生たちにこのことを伝え、これは創立者の気持ちだから受けとっておいてよいのではないかと説得しました。学生たちは、涙ながらに池田先生に感謝をしてお金を受けとり、それぞれの故郷に帰ったのです。

そのうちの一人の学生ですが、お父さんが創価大学に行くことは大反対。お母さんと本人の熱い決意で創価大学に来たんです。お父さんは、「地元の国立大学へ行け、創価大学なんてそんなわけの分からない、将来どうなるかもわからない大学になぜ行くんだ」、というような調子で大反対だった。ところが息

子が夏休みに帰ってきて、お父さんとお母さんに実はこういうことがあったと、池田先生から旅費だといってお金をもらいました、そう話をしたんですね。

するとそのお父さんはじっと話を聞いていて、普段無口な人ですけれども、最後に一言、言いました。「わかった。おまえは将来どんな道に進もうとも、どんな職業に就こうとも、それはおまえの勝手だ。自由だ。ただそのお金は、『創立者の心』だけは忘れてはならない。その『創立者の心』だけは受けとめられる人間になれよ」と。

もうお父さんは創価大学に行くことに対しては何も言わなくなった。創立者の気持ちがどういうところで波動を呼ぶか、私にはわからないのです。ちなみに、その彼は現在35歳。IT企業の社長として年商30億の取引をするなど活躍しています。

またある時、寮長をやっている学生がおりました。創価大学には寮がたくさんありますので、寮長たちが大変に頑張っているのです。池田先生は各寮の寮長に「名前を本に書いてあげよう」と、池田先生の本に寮長の名前を先生が直筆で書いてくださるということがありました。そこで早速私は、各寮長の名簿を池田先生にお渡ししたんですね。そして池田先生は各寮長の名前を本に揮毫して下さった。私は各寮長に、池田先生からの直筆の入った本を渡しました。各寮長はそれはそれは喜んで、感激して帰っていきました。

私はその日の夜、大学を出ようとした時、大学のテラスで一人の男子学生がうなだれてたたずんでいるのです。「どうしたの」と聞いたら、「あの、実は大変に言にくいんですが、創立者池田先生に書いてもらった僕の名前が一字違っているんです」と。私は全身、ぞおっといたしました。

読み方は正しかったんですけども字が違っていたのです。彼は一人、「どうしようか」「間違っているといえば先生に迷惑がかかってしまう」「よし、今日から俺はこの名前でいこう」、そう決意しても、元の私の名前も池田先生からいただいた名前である。そういうことで、どうしようか、ああしようか、と彼はずっと悩んでいたんですね。それで私は早速、「わかった。心配するな」「すぐ先生に報告するから」と言いました。

そこで池田先生に、「大変に申し訳ありませんが、私どもの出した名簿の名前が一字違っておりました」、というように報告しました。先生は、私ども教職員の仕事に対する甘さに対してもものすごく厳しい指示がありました。と同時に彼に対しては、「いいよ」と言って、すぐに書き直してくれました。

そして彼に対して先生は、「よく言ったね。これが大事なんだ。今後の人生

においても、正しいことは正しい、間違っていることは間違っている、と堂々と行っていきなさい。そういう人生を歩いていくんだよ。」このように先生は言ってくれました。彼は蘇ったように、しかもそのうえ先生から人生の非常に重要な意義を与えていただき、ものすごく感謝しておりました。

ある時、創価学園から創価大学に来たUさんという女子学生がいました。彼女は創価学園を出て創価大学の英文科に入ったんですけども、彼女の創価高校の卒業証書の番号が9999番だったのです。9が四つならんでいたのです。彼女はそれを見ながら、「不思議だなあ」「9が四つ並んでいる」「でも10000の一つ足りない」「私には何か足りない点があるのかしら」、そういう思いになってしまった。

そこで彼女は、池田先生に、「先生、私の卒業証書の番号が9999番でした。9が四つ並んでいて不思議な意義があるのかなと思いつつも、10000の一つ足りない。私には何か足りないところがあるのでしょうか」、こういう手紙を出したんです。

先生と奥様はその手紙をご覧になりながら、「可愛いじゃないか」「いじらしいじゃないか」と言われて、「何か一つ足りないなんていうことはないんだよ。この9には次の四つの意味があるんだ。一つは「求道の求」、二つは「探究の究」、三番目に「悠久の久」、四番目が「宮殿の宮」だ。すなわち「求道」「探究」「悠久」「宮殿」だ。求道心と探究心をもってずっと頑張っていけば、自らの生命の宮殿を輝かすことができるんだよ。そういう意味なのだよ。」と言われ、先生はすぐ色紙にその4つの字を書いてくださいました。

私もその色紙を見せていただきました。本当に素晴らしかった。四枚の色紙に、先生の「求道」「探究」「悠久」「宮殿」という文字が書かれている。一人の女子学生にそこまで激励される。しかも先生は、前後賞も忘れずに、10000番目の人と9998番目の人にも「頑張りなさい」と激励の書物を贈ってくださった。

私たちだったら何にも気がつかない。ただボケーとしているだけです。「なに、9が四つ並んでいる。それはオバQだな」。それくらいのことしか思いつかないですけどもね。先生はパッとそのように言われて、一人の学生の心をつかんでくださった。

また懇談のときにある学生が、「先生、ぼくは外交官になります」、「外交官になりたいんです」と言ったんです。すると先生は彼の顔をじっと見て、「そうか、わかった。三回だけ受けなさい。そのかわりその三回の試験を受ける間

は全力をあげて勉強するんだよ。そして三回受けて受からなかったらやめなさい。パッと方向を変えるんだ。いつまでも一つのことに執着してはいけない。そうすればその勉強をしたことは必ず生きてくるんだよ。他のところで生かされるんだ。そのように人生を広く考えて悠々とやるんだ。」と言われたのです。

案の定、彼は三回で受かりませんでした。そのかわり彼はジャーナリストになりました。そして新聞を作るという方面で非常に新たな提案を次から次へと出して、有能なジャーナリストとして活躍しております。

私たちは一つのことにとりつかれてしまうと、もうそれしかない、ややもすると間違いを犯してしまう。もちろん、「石の上にも三年」というように、一つのことを貫徹するんだという考えも一面ではあります。でももう一面では、そこにいつまでもとりつかれて自分の人生を棒に振ってしまっはいけない。パッと方向転換することも大事です。考え方を切り替えることも重要です。そうすればその間に一生懸命にやったことが必ず生きてくるんです。

創価大学にクルーダンス部という、いわゆるヒップ・ホップダンスのクラブがあります。非常に活発に活動しております。そのクルーダンス部、狂ったダンスではありません。

そのクルーダンス部が非常に上手いので、今から10年ほど前ですがNHKの年末の紅白歌合戦に出ることになったのです。紅白歌合戦である歌手のバックダンサーを務めたのです。ところが紅白歌合戦は歌が主眼ですから、歌手のほうに字幕が出たりしてあまりバックダンサーとして踊っているメンバーには光があたらない。しかし、クルーダンス部のメンバーは思う存分その歌手の歌に合わせてバックダンサーとして踊ったのです。

そのメンバーのある男子学生が、池田先生のところに報告にいきました。「池田先生、12月31日の夜、紅白歌合戦に出場します。ただし今回はその歌手のバックダンサーとして踊るので、残念ながら創価大学クルーダンス部という字幕はテレビには出ません。しかし、頑張ります」と。そうしたところ先生は、「嬉しいね。テレビの字幕に名前が出るとか出ないとか、そんなことはどうでもいい。僕は、君たちが頑張っている姿、それが嬉しんだよ。楽しくやりなさい。」このように激励をしてくださいました。これも私には忘れられない思い出です。

またある時、ある寮の寮長さんがおりました。その彼は本当にいい人で、寮生の面倒を一生懸命に見てあげている。先生は寮生の会食会を開いてくださった。その寮生の会食会で先生と一緒にすき焼きを食べながら、いろいろな寮生の話を聞かれたりされ、激励を続けられた。その間その寮長は、一生懸命ずっ

と、みんなが困ったことはないか、問題はないか、会食会がうまくいくように、場内を点検していたんです。

その時先生がふと私を呼んだんです。ちょっと来いと。それで私、先生のお側にいったんです。すると先生が、「彼は最近、両親が離婚したのか」と言われたのです。私はそんなことはわかりませんでしたので、「いえ、ちょっと申し訳ないのですが何も詳しいことは聞いておりません」と言いました。すると先生はその時に、「責任者というのはどんな小さな問題でも、さりげなく、何でも知っておくことが大事だ。そのかわり、その知ったことをベラベラしゃべるようでは失格だ。自分が知りえたことを安易にしゃべるようではいけない。しかし、何でも知っておくことが大事である。」先生はこのように指導してくださいました。

私は、なるほど、と感動しました。普段、学生部長と寮長という立場でしか、いわばそういう肩書きとか身分とか立場という形でしか付き合っていないで、彼がいつも元気で明るく振舞ってますので別にそんなに個人的な問題はないだろうと安心していただけです。ところが実は、彼のお母さんが池田先生に手紙を出して、「最近主人と別れました。自分の息子のことが心配です」、そういう手紙を池田先生に出したみたいなんです。それで先生は大変に心配されて、私に何か知っていることがあるのではないかと思って、さりげなく、私に聞かれたのです。私は何も知りませんでしたので、知りません、わかりません、と申し上げたのです。先生は、「責任者というのは、現場のことはさりげなく、あらゆることを知っておくことが大事なんだ。そうすることでいざというときに適切な手が打てるんだ。そのかわり自分の知りえたことは人に漏らしてはいけない」。こう先生は言われたのです。

また、ちょうど東京創価小学校が開学した時のことです。もうずいぶん前ですけれども。その時先生は何度も創価小学校に行かれました。そして私も度々池田先生に随行させていただいて創価小学校に行ったことがあります。その時の一言が今でも忘れられません。先生は創価小学校の生徒に向かって何と言われたか。「みんな、しっかり勉強するんだよ。今は不自由でも、今、勉強しておくよ、将来自由になれるんだ。どんな職業にもつける。どんな外国にも行ける。今、勉強していれば、今は不自由でも、将来、自由になれるんだ。そのかわり、逆に、今、自由で、『遊びたいから遊んでいるんだ』、そういう気持ちでいると、将来、不自由になってしまうよ。自分がやりたいこと、自分が行きたいところに行けなくなっちゃうよ。今、不自由でも、将来、自由になるんだ。

また、今、自由がいいからと言って遊んでいると、将来、不自由になってしまうんだよ。」そう先生は、優しく、創価小学校の生徒に言うておられました。

そして先生は、ある時に学生に、「みんなが注目しているなかで勝っていくことが大事なんだ。誰もいないところで自慢したり、威張ったりしても、意味がないんだ。皆が注目しているなかで勝っていきなさい。そこで成果をあげていきなさい。誰もいないところで自慢したり、狭い世界で威張ったりしても、それは一人よがりになってしまうんだ。」こう言われました。

創価大学の本部棟ができた時の話です。

先生は、本部棟を建てる段階で、一生懸命に検討してくださいました。高さはどれくらいにするか、どのような感じの建物にするか、いろいろ示唆されました。ある時先生は、「本部棟の高さはモスクワ大学の建物よりも高くしてはいけない」。「モスクワ大学よりも少し低くしなさい」、とパッと言われました。「あれ、何でそんなことを先生は言われたのかな」と思った時に、先生は、「いいかい、モスクワ大学は私に初めて名誉博士号を授与してくれた大学なんだ。その大学に対して最高の礼を尽くす意味においても、モスクワ大学より本部棟を高くしてはいけない。少しモスクワ大学より低くしなさい。」と言われました。先生が考えられることは、あらゆる観点から私共の思いつかない視点から物事を考え抜かれているのです。

先生の名誉学術称号がいよいよ2010年11月で300になります。300です。ここ最近、5月、6月、7月、8月の期間だけでも先生がいただいた名誉学術称号というのは、素晴らしいものがあるのです。

一つは5月、中国の清華大学。アメリカが将来中国に知米派を育てるために、1911年に作った大学が清華大学です。ですから、大学の中味は全部アメリカと同じ方式の教育内容になっている。胡錦濤国家主席をはじめとする中国の国家指導者のほとんどは清華大学の出身者です。この清華大学が池田先生に名誉教授の称号を5月に、突然、差し上げに中国からやってきた。というのは、今、中国は、厳しい国家管制が布かれていて、大学の学長や教員が世界に行くことについては少し制約がかかっているのです。そこで、清華大学の学長が東京大学で清華大学との合同シンポジウムがあるということで、来日することになり、その時に創価大学の創立者に名誉教授を差し上げたいということが決定しました。

これで中国からの池田先生に対する名誉教授などの称号の数は100を超えました。しかも中国で最も良い大学というのは、清華大学、北京大学、そして上

海の復旦大学。この清華、北京、復旦、というのが中国の三大大学なのですが、この3大学すべてから池田先生には名誉学術称号が贈られている。

また二つには、2010年6月にはアメリカのジョージ・メイソン大学が先生に名誉博士号を授与されました。ジョージ・メイソン大学というのは、紛争・平和問題の研究では世界の第一級の大学です。私は、ジョージ・メイソン大学が池田先生に名誉博士号を授与するという話を聞いたときに、「すごい。あの大学がよく先生に名誉博士号を出すことになったな」と、驚きでいっぱいでした。

関係者に聞いてみました。そうしたらアメリカSGIの学術部長がジョージ・メイソン大学の教授だったのです。その教授がジョージ・メイソン大学の学長に、「実は日本に池田大作という大変に立派な業績、見識、人格をもった人がいる。是非、我が大学から名誉博士号を出したらどうでしょうか」と進言したのです。

学長はその話に変にに関心をもちまして、この件をさっそく大学評議会にかけよう、ということになりました。そこで池田先生の業績を全部紹介したので、最後に学長が、「どなたか池田大作氏をご存知の方はいますか」と聞きました。そうしたら、一人の学部長がパッと手を挙げて、「知っております。10年前、私は池田大作氏がコロンビア大学で講演をした時、そこに参加しておりました。講演の中味、学識、見識の深さに感動して、今でも覚えています」と言ったのです。

その発言で場内の雰囲気がパアッと明るくなり、池田大作氏に名誉博士号を授与しようということが決定しました。しかも、ジョージ・メイソン大学始めて以来、大学を離れて、創価大学まで来て、授与式を行ったのです。

そして三番目に、2010年8月の初めには東南アジア最高峰の大学であるマラヤ大学から池田先生に名誉博士号が贈られました。マレーシアといえばイスラム教の国です。イスラム教の国の大学の卒業式の席上、池田先生に名誉博士号が授与されました。池田博正副理事長が代理授与で出席されたのです。

卒業式は、卒業証書を一人一人の学生に渡すので、3時間ばかりかかるそうです。その卒業式の冒頭に、池田先生のビデオメッセージが流れ、池田博正副理事長が先生の謝辞を代読し、名誉学位を受け取りました。マラヤ大学では、「卒業式の冒頭に池田先生への名誉学位の授与式を行ったことで、式典全体が引き締まりました。誠に荘厳な宗教的な雰囲気のなかで先生への名誉学位の授与式、および卒業式を行うことができ、これ以上に名誉なことはありません」と称えられたのです。

しかも卒業生の最優秀生の学生は、今から10年前、まだ12歳の時にマラヤ大学で行われた池田先生の写真「自然との対話展」に両親に連れられて参加していたとのこと。この学生も非常に感動していたそうです。

池田先生に名誉学位が授与されるにいたる経緯には、だいたい三つあるようです。一つは、その大学の学長や総長が池田先生の『トインビー対談』（『21世紀への対話』）を読んで非常に感銘を受けたというケース。池田先生の『トインビー対談』がもつ影響力には計り知れないものがあります。先生の『トインビー対談』を読んで、学長や総長が、あの20世紀の世界的な歴史学者トインビーに勝るとも劣らない学識と見識をもつ池田先生に、是非、名誉学位を贈りたい、ということになるのです。

二つは、総長や学長の秘書に、あるいは、その大学の教授にSGIのメンバーがいて、その秘書や教授が総長や学長に池田先生のことを話し、総長・学長が理解をして、池田先生に名誉学位を贈るというケースが二つ目です。

三番目に、創価大学との交流、並びに創大生がその大学の教員になっていて、その大学の総長・学長に先生のことをお話して名誉学位の授与が決まるというケースです。創価大学との交流を通して、また創価大学卒業生が海外諸大学の教員になって、先生のことを話し、名誉学位が決まってくるのです。

マラヤ大学の場合はS君という学生がマラヤ大学に留学して、そこで一生懸命勉強して、マラヤ大学の総長の息子、すなわち皇太子の家庭教師をやったのです。そこで先生のことを話し、先生の写真展をやったりして、それが今回のマラヤ大学からの池田先生への名誉学位の授与に繋がっていったのです。

またこの間、キルギス共和国の二つの大学から先生に名誉学位が授与されました。これはI君という学生がおり、彼はキルギスの大学の教員になりました。彼は大学の教員として活躍しながら、池田先生のことを話し、今回の名誉学位の授与となっていったのです。

そして、インドに創価池田女子大学という大学があります。これはインドの実業家であるクマナンさんという方が創立した大学です。この人は、詩人なのです。彼のお父さんと本人は二代にわたって貿易商なのです。それで詩人です。クマナン氏は池田先生の詩に大変に感動して、なんと創価池田女子大学という大学を設立しちゃったのです。その大学では、授業中、必ず池田先生の詩を暗誦させる。池田先生の著作を読ませる、ということをやっているんですが、この大学を陰で支えているのが創大卒業生のI君という人なのです。彼がクマナンさんにいろいろと先生のことを話し大学を運営しているのです。

このように世界のいろいろな大学で創大生、創大卒業生が活躍し、創大創立者の池田先生を宣揚し、それが先生への名誉学位の授与へと結びついているのです。すごい時代がきたと思います。

これから香港創価幼稚園、マレーシア、シンガポール、ブラジル、韓国、そうしたところでの創価幼稚園の卒園生、またアメリカ創価大学の卒業生、日本の創価大学の卒業生はもとより、いろいろな人が、様々な形で、世界の隅々にまで、池田先生の思想、哲学で影響を及ぼしていくことは間違いないと思います。

先生は、「世界だ。世界が相手だよ。これを忘れてはならない。もちろん、常日頃は地道な地域にしっかりと根を降ろして活動をしていくんだけど、しかし常に視点は世界に向けていくんだ。世界が勝負だよ。」とつねに言われております。

近年、先生は、創価大学、創価学園の卒業式に出席されるたびに、必ず二つのことを強調されます。一つは、「親孝行すること」。二つは、「語学を学びなさい」「特に英語、中国語。語学をやりなさい」。先生はこの二つを学園生、創大生に必ず言います。

創価大学の先生には偉い人がいるんです。中国人の先生で中国語を教えているのです。同時に、慶応大学、早稲田大学でも教えている。その中国人の先生は、池田先生の入学式、卒業式でのスピーチを聞いた後に、授業で創価大学の学生にアンケートを採ったそうです。誕生日にお父さん、お母さんにプレゼントを贈った人がいるかという。そうしたら創大生は90パーセントがお父さん、お母さんの誕生日に誕生祝いを贈ったそうです。その同じアンケートを他の大学で行った。この中でお父さん、お母さんの誕生日に誕生祝いを贈った人。わずか40パーセントでした。

その中国人の先生はそこの大学の学生に言ったそうです。「君たちはいくら頭が良くたって人間としては失格だ」「両親を大事にするのは当たり前でしょう」と。池田先生が言われたことをそのままそっくり、その大学の学生に教えたそうです。

今の日本で起こっている様々な問題、とくに無縁社会などといわれている現象。これらは結局は両親との絆、親子の絆、それが脆弱になってしまっているところから起こっている、と言えると思います。

しかも先生は学生に言うだけではありません。最近の入学式では、先生のスピーチの時に、先生はいきなり英語と中国語である箴言を読まれました。ある

箴言を英語と中国語で学生に呼びかけたのです。先生は、「今の箴言、意味がわかった人」と言われました。すると前列にいた男子学生が「ハイ」と手を挙げて、最近の先生が英語と中国語で紹介された箴言の意味を堂々と答えたのです。先生は、「偉い」と言ってほめてくださった。

そして先生は、中国人や外国人の先生に向かって、「私の中国語と英語は大丈夫でしたか」「私の英語と中国語は通じましたか」と聞かれたのです。先生は、「今度の入学式では英語と中国語でやるよ」という話を数ヶ月前から言われ、毎日、その英語と中国語の文章を繰り返し練習され、当日の朝も、式典に出席される寸前まで、その文章の練習をされておられた。そして先生はスピーチのときに英語と中国語で話しかけられたんです。

なお、答えた学生は、両親がなく、4年間、奨学金とアルバイトで生計を立て、かつ、最優秀の成績を修めているという学生でした。先生はその話を聞かれて、「そうか、偉いな」と言われ、執務室にあった紙に、「母がいつも見つめている、父もまた共に見つめている、君よ、大切な君よ、大勝利者の人生たれ」、このように揮毫してくださったのです。

先生は、学生に単に、「英語が大事だ」「中国語が重要だ」と言うだけではありません。発破をかけるだけではないのです。先生自らが勉強されている。先生は、「自分はあらゆることを学んできたけれども、残念ながら語学だけは戸田先生は教えてくださらなかった」。そう言われながら、だから「語学をやるんだ」と強調され、かつそれを自ら実践されているのです。

先生は、「自分の人生に悔いはない。私の人生に全て悔いはない。ただ、一点の悔いがあるとすれば、それは英語を学ばなかったことだ。1973年、トインビー博士と対談をした後、トインビー博士が大変に気に入って、オックスフォード大学の、いわゆる特別の紳士だけが集るクラブに私を招待してくれたんだ。その部屋は本人とその特別のゲストしか入れない。奥さんもだめ、通訳も入室できない。私とトインビー博士と二人だけでその食事会に行くことになった。そこで食事をしながら、トインビー博士がいろいろと話しかけるんだけど、私は『イエス』『イエス』、もうそれしか言えなかったんだ。あの時の地獄の苦しみ、あの時の屈辱感、あの時の無念さ、私は生涯忘れない。若い人はこれから世界のどんな人とも堂々と太刀打ちできるだけの語学力、それを磨く必要があるのだ。」と先生は言われ、創大生に、とにかく「親孝行しなさい」、そして「英語をしっかり勉強しなさい」、と強調されておられる。そして、自らも一生懸命に英語と中国語を勉強して下さっているのです。

先生は激務の中、いろいろと学生を激励してくださっておられます。ある日、二人の男子学生と、偶然、出会いました。先生はその二人に、「今、何してるの」と聞かれました。一人の学生が、「はい、運動をやっています」「サッカーをやっています」と答えた。もう一人の学生は、「はい、音楽をやっています」と言ったのです。先生は、「うん、運動や音楽も大切だけでも、学問もしっかりやるんだよ」と言われ、さらに、「今自分が手がけている学問のなかで一番の得意は何」と聞かれたのです。そうしたら一人の学生が、よせばいいのに、胸を張って、「はい、英語です」と答えたのです。すると先生は、「そうか。じゃあ、英語で何かしゃべりなさい」と。彼はう～んと詰まって、「すぷりんぐ・はず・かむ」。先生は一言、「駄目だな」と言われ、「突然だったんでびっくりしたんだろうけど、自分が手がけていることは、突然、何を聞かれても答えられなきゃいけないよ」と言われました。

すると隣にいた学生が、これまたよせばいいのに、「先生、僕はフランス語をやってます」と言ったんです。すると先生は、「そうか。じゃあ、パリはなんでパリって言うの」と聞かれました。学生は、「わかりません」と顔を赤らめました。先生は、「さっきも言ったけれども」といいながら、「自分が手がけていることについては、いつ、どこで、誰から、何を聞かれても、答えられるようにしなければいけない。私は10年間、戸田大学で、あらゆる学問を教わった。その結果、今では世界のどんな学者とでも、どんなテーマでも、打ち合わせることができようになった。二人ともしっかり勉強しなさい。」と激励されました。そして、「二人は今いくつだ」と聞かれた。「19歳です」「大学二年生です」と答えた。そうしたら先生が、「そうか。僕が戸田先生と会った時と同じだね」、「偉くなるんだ」、「頑張るんだよ」、と言って先生は二人をどこまでも励まされた。本当に先生のすごい激励でした。

また、ある一年生の男子学生に先生は、がっちり握手をしてくださいます。「う～ん、良い服を着てるね」「いい顔をしてるね」「映画俳優みたいだね」、と言われ、「ご両親は」、と聞かれたんです。すると彼は、「はい。両親は……、二人おります」。先生は、「そうか。両親は、一般的に、二人なんだよね」と言われ、「両親を大事にするんだよ」と促されました。その学生は先生に、「自分の祖父が亡くなって、その折、追悼の電報を池田先生からいただきました。ありがとうございます」とお礼をのべました。すると先生は、「そうか。お爺ちゃん、残念だったね。じゃあもう一度、今日僕がお爺ちゃんの追善の供養をしてあげるから、名前を書いて出してね」、そう言われて激励されたのです。

ある時、池田記念講堂の前を一人の女子学生が歩いておりました。2009年、冬でしたので寒かったんです。ちょうど先生と奥様の乗った車はその女子学生の傍を通った時、先生は車を止められました。先生は窓を開けられて、その女子学生に、「元気？」と声をかけ、握手されました。そうしたらその女子学生の手が冷たかったんです。すると先生はその女子学生の手をずうっと引き寄せられまして、奥様の手をその女子学生の手の上に乗せられ、先生と奥様の手でその女子学生の手を温めるようにしたのです。そして、「寒いから風邪をひかないように頑張るんだよ」と先生は励ましてくださったのです。

本当に、何気ない一瞬ですけれども、池田先生は創価大学の学生を息子のように、娘のように、心から大事にして、「その学生が将来どういう立場になるかわからない」「世界で活躍するかもしれない」「地域で頑張ることもある」「職場でなくてはならない人になるだろう」と期待を込め、あらゆる角度から激励されるのです。

ある時、先生と教員の代表が懇談する機会がありました。先生が、「本当に優秀な学生というのはどういう学生かわかるか」と聞かれました。我々は教員ですから、本当に優秀な学生は、と言われると、「はい、学問ができる学生です」、「成績の良い学生です」、とか、「文武両道の学生です」、とか、あるいは「後輩思いの学生です」、とか、もういろいろな答えがあがったのです。

すると先生は、「いずれも大事だけれども、本当に優秀な学生というのは、生涯母校を大事にして、母校の発展を祈っていく学生なんだ。これが大事なんだよ。その視点を忘れてはいけない。人間としての恩義、人間としてのあり方を忘れてはいけないんだ。」と言われました。私は、ハッと胸が突かれる思いがしました。ややもすると、成績が優秀だとか、勉強が優秀だとか、そういう面に私たちは流されてしまいますけれども、人間として一番大事なこと、それは、自分が生い育った母校を大事にしていく、これが要だと思います。

また、先生はある時、「これは戸田先生から教わったことなんだけれども、ある時戸田先生が、『尊い生涯とは、人生の偉大な生き方とは何かね』と聞かれたんだ。その時、周りの人はいろいろなことを答えた。すると戸田先生は、嬉しそうに、それらの人たちの答えを聞きながら、最後に言われたことは、『人生の偉さというのは、一つは若い時の信念を生涯貫くこと、一生涯、若い時に決めた信念を貫くこと』である。これが一つ。そしてもう一つは、『たとえ年をとっても青春のような瑞々しい、若々しい生命で、生きぬくことなんだ』。年をとって肉体の衰えは避けられない。しかし精神的には、いつまでも若々し

く生きていくんだ。この若いときの信念を貫くこと、また年をとったとしても若々しく生きていくということ、これが「本当の人生の偉さ」なんだよ。私は戸田先生からこの二つを教わったんだ。」と池田先生はこのように教えてくださいました。

先生は創大生に和歌を詠んでくださいました。それは、「創大の、使命も深き、君たちの、心躍らせ、生涯見つめん」です。私は、この歌が大好きです。

### 3. 青年に関すること

これまでは、創立者池田先生の創価大学建設にかける思い、また学生に対して心からの激励を惜しまない、その創立者の激闘の模様をご紹介させていただきました。これからは、もう少し枠を広げて、青年一般に対する、また人生全体に対する私たちのあり方、そういった意味のものについてお話をさせていただきたいと思います。

今から、そうですね、ちょうど創大開学の頃ですから、37～8年前になりますか。太陽の丘、緑の丘といていた所に新総合体育館があるんですが、あそこは文字通り、山であり丘だったのです。当時、創立者池田先生のご提案により、公園を作ろう、ということになり、緑の丘公園、太陽の丘公園、という公園を学生と教職員一体となって、鎌を持ち、鍬を持って、雑草を取り払い、公園を作る作業を行なったのです。

池田先生もそれに参加してくださいました。先生自ら麦わら帽子をかぶって、作業服を着て、雑草を刈ってくださいました。お昼ごろ、一休みしよう、ということになり、先生をぐるっと囲んで、緑陰懇談会みたいになったのです。その時、一人の女子学生が、「池田先生。私は将来、ずっと池田先生のそばにいて池田先生のお仕事を手伝う仕事をしたいと思います」と、言ったんです。

すると先生は、にっこりと笑って、彼女の顔を見て、「嬉しいね。その気持ちは忘れないよ。でも全ての人が僕の周りで働くわけにはいかないんだ。そうではなくて、僕の心をもって、それぞれの地において、それぞれの立場で、各人の職場で、将来頑張ってもらいたいんだ。『出でよ、10万の池田大作』だよ。」と言われたのです。

「出でよ、10万の池田大作」。みんなが先生のおそばにいて先生の仕事をお手伝いするわけにはいかない。大事なことはそうではなく、先生のお心を帶し、

先生の胸中を察し、先生と同じ気持ちになって、それぞれの立場、職場、地域で頑張っていくことが大事なのです。

またある女子学生が、「先生の夢は何ですか」と聞きました。

すると先生は、「僕の夢は、若い頃は新聞記者になることだった。もう一つは、日本全国の駅に、桜の木を植えること。日本中を桜で満開にしたいということだったんだ。新聞記者になることと日本中の駅に桜を植えたいということ、これが僕の夢だった。でも、根本的な夢は、恩師戸田城聖先生の夢を実現することである。師匠の夢を実現することが、これが僕の最大の夢になったんだ。」と答えられた。

私たちも、先生の著作、先生の様々な出版物、そういうもの等を読みながら、先生の理想は何なのか、先生の夢は何なのか、これを考えていきたいと思いません。

その師匠の夢を実現しようとする時に、無限の力が湧いてくる。変な諍いがなくなる。無用な軋轢がなくなる。皆が師匠と同じ心で、師匠の夢を実現しようとして立ち上がったときに、私は、全てがうまくいくのではないか、と思うのです。

先生は、師匠の夢を実現してくれる、そういう人材の育成に全力をあげているのですが、しかし一面、先生は、「人材育成、これにはある意味では厳しくしなければいけない。『賢聖は罵詈雑言して試みるなるべし』、こういう御文があるじゃないか。これはと思う人材には、徹底して厳しくするんだ。そこから這い上がってきた人間が本物になるんだよ。」「獅子は自分の子どもを千尋の谷に突き落とす。そしてそこから這い上がってきた子どものみを育てるといふ。まさにこの中国の諺にあるように、『人材というのは徹底して訓練して育成する。こういう面もあるのです』」、先生はこのように話されたこともあります。

ある時、女子高校生が、池田先生に、「先生、しっかり頑張ります」、と言ったんです。涙を流して、先生の話が終わった後に、感激してですね、「先生、しっかり頑張ります」と決意をのべたのです。話が終わって先生が歩きながら部屋から出て行かれる時でした。すると先生は、彼女のほうを振り向きもせず、「信じないよ」と言われたのです。

「その言葉、あなたが20年後にどのような姿で私の前に現れてくるか、その時に信じよう。女性というのは、わずか一瞬、決意しても、すぐその後、いろいろな縁に粉動されて、目的を見失ってだめになってしまうんだから。」と言われ、「真っ直ぐに、純粹に、前に向かって進むことが大事なんだ。特に女性は、一

つは、哲学をもつこと。もう一つは、良い先輩をもつこと。これが女性が道を誤らない方法なんだ。哲学をもつこと、良い先輩をもつこと、そして真っ直ぐに、自分の決めた道を歩んでいくんだよ。」先生はこのように強調されました。

また、ある時、先生は、「組織にしても、何事にしても、一人のキチガイがいれば発展するんだ。キチガイがいれば大丈夫だよ。キチガイというのは言葉は悪いけれども、いわゆる真剣な人という意味なんだ。組織が弱いとか、皆がついてこないとか、そんなことを嘆く必要はない。一人のキチガイがいれば、一人の真剣な人がいれば、必ず組織は発展する。皆がついてくるんだ。」と言われました。

そして、「人間は誰でも、特に青年は、最高のものを見なければいけない。一流のものに接しなければいけない。一番、極上のものを極めなければならない。そうした最善のものに接することによって、自分の境涯も、自分の人格も、高められていくんだよ。」と言われました。

そして、「そうした一流に接していくことによって、自分の境涯も、人格も高まっていく。だから私は、大学も、創価学会の会館も、一流のものを作るんだ。いいものを作るんだ。そして、しょっちゅう、そういう最高のところに入りしている、そのことによって、将来諸君が偉くなって、バッキンガム宮殿にいこうが、国会にいこうが、絨毯に足がつまづいて転んだとか、そういうことがないようにしているんだ。通常、日常的に、最高のものに接することによって、自然に最高の人格、人間性が備わってくるのだ。最高のものに人間は接しなければいけない。一流のものに触れなければならない。」

と先生は強調されます。

前にご紹介したアメリカのデューイ協会。20世紀最高のアメリカの教育哲学者デューイ。ある時、池田先生は、「ジョン・デューイが自らの信条としていたことは何だかわかるか」と聞かれました。一人一人答えました。ある人は、平等です。ある人は、生命の尊厳です。ある人は、価値創造です、などなど。こういう難しいことを答えたのです。すると先生は、「ちがう、ちがうだよ。あの偉大な哲学者、教育学者デューイが信条にしていたことはたった一つ。それは、『威張らないこと』なんだ。哲学というのは、非常に易しいところに本質がある、と思われている。しかし、あの最高の教育哲学者デューイの信条は、『威張らない』ということだったんだ。学校の教師、教育者、そういう者が威張ったり、生徒を見下ろしたり、見下したり、そうしたらもうおしまいだ。威張らないこと、これがデューイの最高の信条だったんだよ。」と教えてくださいま

した。

ある時、先生がスピーチを終えられて、ゆっくりと場内の一人一人を見ながら、退場されたのです。一番後ろのほうに青年が座っておりました。先生はある青年に声をかけながら、「名前はなんていうの」と聞かれました。そして、「今、いくつ」とたずねられた。すると彼が、「は、はい。二十歳です！」と言ったんです。先生は、「うん、そうか。二十歳にしては少し老けてるね」ともらされた。すると彼は、「失礼しました。三十六歳です！」と答えた。すると先生は、「そうか。何で、二十歳ですと言っちゃったの」と聞かれた。すると彼は、「き、き、緊張してました！」。先生は、「そうか。緊張すると二十歳になっちゃうんだ」と言われて、「うん、まあいいや。しっかり頑張りなさい」と言われ、先生は彼としっかりと握手をしてくださったのです。じつに、ほほえましい光景で、私は、先生の青年に対する期待、本当に素晴らしいなと感動しました。

その折、女性に対して、先生は、再度言われました。「女性、女子学生、みんな仲いいかい」と。「女性で一番大事なことは、『仲が良い』ということなんだ。同じ世界で、一緒に生きる限りは、仲良く、楽しく、やっつけていきなさい。いがみ合ったら損だよ。朗らかなほうがいい。仲良くやっつけていくんだ。」先生は、女性のあり方として一番大事なこと、それは『仲が良い』ということであると教えていただきました。

そして、「それぞれみんな、いろいろなことをやっているだろうけれども、みんながやっていることは偉大なことなんだよ」と言われた。「あのライト兄弟が初めて飛行機を飛ばしたとき、海岸の片隅で、隠れて、誰にも知られずに、兄弟で飛行機を作って、最初の飛行機を飛ばしたんだ。飛んだのは、わずか267メートル。しかも、それを見ていたのは、たったの5名だ。でも、そこから今日の大航空機時代が始まったんだよ。今、私たちは全世界を飛行機で飛び回ることができようになっている。歴史というのは、100年経てみないとわからない。最初は、本当に、些細なことかもしれないけれども、偉大なことになっていくんだよ。そういうことを確信してやりなさい。」このように先生は、私たちが物事を成し遂げる時に、大事なことを指摘していただきました。歴史的な大きな事件も、歴史的発明も、実は、ささやかな、目に見えない、ある意味ではつまらないところから、出発し、それが非常に大きな発展につながっていくという場合が多い。私たちも、しっかりと、私たちのやっていることの意味を、確信していくことが大事だと思います。

ある時、ある青年が先生に、「先生、真の友だちとはなんでしょう」と聞

いたことがあります。先生は、「真の友だちというのは、一つの目標に向かって一緒に進んでいくこと、その中から、真の友だち、友情が生まれるんだ。そして、友が悩んでいるときは、一緒に悩み、友だちの成績が良いときは一緒に喜んであげる。僕の好きな歌に、『君が愁いに我は泣き、我が喜びに君は舞う』これは僕が本当に好きな寮歌の一節なんだよ。これが真の友情だ。」と先生は、言われました。一つの目標に向かって共に進んでいくなかに、そこに真の友情が生まれる。そしてそのなかで、友が悩んでいるときには一緒に悩み、友が喜んでいるときは一緒に喜んであげる。「君が愁いに我は泣き、我が喜びに君は舞う」、これが大事な友情なんだ、こういう先生のお話でした。

ある高校生が池田先生に、「先生は何をしているときが一番楽しいですか」と聞きました。先生は、

「いい質問だねえ。昭和32年7月、私は戸田先生に、四ッ谷駅を歩いているときに、同じことを聞いたんだよ。その時、戸田先生は、『君たちと話すときが一番楽しいよ』と言ってくださった。私も、一つは、君たちと会って話すときが一番楽しい。そしてもう一つは、後世に残る文章が書けたときだ。私には、偉い人を見たって全て裏が見えちゃうんだ。買いたいもの、見たいものなど、私には何もない。ただ、将来に向かって進んでいく天使である君たちと話すとき、また文章を書くときが、一番楽しい。しかし、文はなかなか書けない。結論的には、君たちと話すときが一番楽しいんだよ。」と先生が言ってくださいました。青年、また未来を担いゆく学生たちと、話をする時が一番楽しい、とよろこんでくださる。私たちもまた、その先生の心情に触れて、池田先生とお話をしているときが一番楽しい、という気持ちになりました。

私は、さきほど申しました創大の学生部長時代に、大変にありがたいことに、池田先生と、一時間、二時間と、話をさせていただいたことがありました。池田先生とお話をさせていただいているときの自分の生命の躍動感、自分の生命の喜び、それは他の何ものにも代えることができない、本当に充実した時間でした。どうか、私たち一人一人も、後輩の人たちから、「あなたと話をしているときが一番楽しい」、「あなたと対話をしているときが一番嬉しい」、「あなたに話を聞いてもらっているときが一番充実している」、こう言われるような自分になっていきたいと心がけたいものです。

ある時、ある青年が先生に、「リーダーとして心がけなければならないことは何でしょうか」、と質問しました。

先生は、「いろいろあるけれども、簡単に言ってしまうえば四つだ。一つは、リー

ダーは明るいこと。二番目は、ユーモアがあること。三番目は、誠実なこと。四番目は、真剣であることだ。人はリーダーの真剣な姿を見て、ついてくるんだよ。この『明るさ』、『ユーモア』、『誠実』、『真剣』、このうちどれか一つ、特色をもっていなければいけない。この四つを兼ね備えていれば、それは理想だけれども、この一つを備えていることが大切だ。特にリーダーは、自分に悩みがあったとしても、いつも明るく、元気でいなければいけない。後輩をリードしていく責任があるんだから。そう振舞っていくなかで、自分の悩みも消えていくよ。」と教えてくださった。たとえ悩みがあっても、いつも元気で明るくなければ後輩はついて来ない、また、そう行動していくなかで自然と自分の悩みも消えていく、人生はこのようなものだと思います。

先生は、「人間として大事なこと」として、次のように教えてくださいました。

「人間は腐らないことが大事なんだ。腐ったら人間はおしまいだよ。不満をもつより、不平を言うより、批判をするよりも、自分が力をつけるんだ。自分が境涯をあげるんだ。不満ばかり言っている人は可哀想だ。その生命は地獄であり、修羅なんだ。苦難、困難こそ、自分を成長させるバネとして、とらえていくことが大事だ。どんなことがあっても、人間は腐ってはいけない。自暴自棄になってはいけない。」これまた先生の、哲学的、人間的、見方なんです、ある人が、「池田先生はどのような人が理想ですか」と聞かれたんです。

すると先生は、素晴らしい言葉なんです、「静かだが深い人、優しいけれど強い人、平凡だが英知の人、純粹だけど勇気のある人、こういう人かな。」と答えてくださった。静かだが深い人、優しいけれど強い人、平凡だが英知の人、純粹だけど勇気のある人、こういう人が大事だな、と先生は強調されました。

性格が大人しい、性格が静かである、それはそれでいいわけです。だけど深い人。私の先輩にもいました。本当にしゃべらない。無口。でもその先輩が発する一言は非常に深い。重みがある。そういう先輩がいました。また優しいけれど強い人。単に優しさだけだと騙されてしまう。優しさだけだと自分が負けてしまう。優しいけれども、しかし非常に強い。確固たるものもっている。こういうことが大事ですね。平凡だけど英知の人。います。昔の、お年寄りの方。学歴がなくても、学校なんか行ってなくても、本当に平凡な庶民だけど鋭い智恵もっている。鋭い判断力もっている人が昔はたくさんいました。そして、純粹だけど勇気のある人。純粹な人というのは、とかく、純真で、純粹

だけでも、勇気がない、というケースが多い。いざ、という時に物を言わない。ここ一番、というときに立ち上がれない。そういう人がいます。それではいけない。純粹だけど、いざというときは、勇気をもって立ち上がる。こういうことが大事だと思います。

私は、先生のこの言葉が大好きです。本当に、静かだが深い人、優しいけど強い人、平凡だけど英知の人、純粹だけど勇気ある人。先生のこの人間像は、本当に大切だと思います。

さきほどの、「人間は腐ってはいけない」という話と関連しますけれども、先生は、ある時、奥多摩の多摩川の清流を見ながら、次のように言われました。「川のなかを見ていたら、魚が岩と岩の間をスイスイと泳いでいるのがわかる。魚は岩にぶつからないだろう。それと同じように、私たちの人生も困難、苦難の連続だけど、その困難、苦難を、スイスイとうまく乗り越えていくんだよ。乗り越えられないわけがない。」また、「多摩川を見ても川の流れがきれいじゃないか。川というのは流れているからきれいなんだ。川の流れがとまってしまったら、たちまち、水は腐ってしまうんだよ。人間も同じだよ。動いている人、絶えず考えている人、そういう人は腐らないんだ。川の流れのように、常に清らかに、物事が進んでいくんだ。」と教えてくださいました。

ある時、ある青年が、「先生、人材育成ということで悩んでおります。どうすれば人材は育成できるのでしょうか」、と聞きました。

先生は、「人材育成の要諦はテクニックではない。それは大誠実しかない。自分には出来ないことを君がやってくれという根本的な大誠実がなくてはいけない。心より、この人を人材に育てようという気持ち以外にないんだ。そうすれば、その人が敵に走るようなことがあっても、心の底では慕ってくれているんだ。大誠実が根本である。そうすれば、10人の人がいて3人しか育たなくても、その3人が10倍の働き、すなわち30人分の働きをしてくれるんだ。テクニックでは9人育てたとしても9人分の働きしかしないんだ。大誠実で接していけば、必ず人は育ちます。」と激励して教えてくださいました。

そして、ある青年が、「先生、本物になるにはどうしたらいいのでしょうか」、と聞きました。その時先生は、「あらゆる問題を避けないことだ。うんと苦しむことだ。そして自分に与えられたことを真っ向から受けてやっていくんだ。自分が本気になれば皆が変わる。戦後の日本の有名人もほとんど中国、朝鮮から引き揚げてきた人たちだ。そういう人たちが戦後の日本を築いたんだ。ユダヤ人は迫害されるなかから人材を生んでいるではないか。」

と答えられました。

またある人が、「先生、力はありませんが頑張ります」、と言ったんです。すると先生は、厳しい口調で、「力がなくてどうするんだ。どうして力をつけなかったんだ。力がなければ人を守れないよ。力をもつんだ。力をつけるんだ。弱虫ではいけない。この間、この近くの老人会の踊りがあった。皆、すごく上手かった。力があるんだ。彼らは、力がなければ生きていけないんだ。背水の陣で、皆、戦っているんだよ。何事も開拓者でなければいけない。プロでなくてはならないんだ。」激励しておられました。

こういういくつかのお話をご紹介いたしましたけれども、いずれも私たちが直面して、悩み、苦勞している問題だと思えます。先生は何を聞かれてもスパッ、スパッとその本質を突いて、心からの激励をしてくださっておられたのです。

青年に関する指導のなかで、「礼儀」ということについて、先生はいくつか教えてくださいました。

そのなかで特に先生は、「食事はガツガツ食べてはいけない。食事の食べ方一つでその人の品格、人格がわかるんだ。特に日本人は、昔は食事のときはしゃべってはいけないという教育があったけれども、あれは儒教の教えだ。今は違う。今は、食事のとき、ゆっくりと食べながら、高尚な話をするんだ。それが一流の生き方だよ。」と教えてくださいました。「特に気をつけなければいけないのは、給仕をしてくれる人、調理をしてくれる人には必ずお礼を言うんだ。物をもってきてくれたり、あるいは調理してくれる人には必ずお礼を言うんだ。私はレストランに行ったときに真っ先に行くのは厨房なんだ。厨房で働く調理人さんたちに、「お世話になります」と言う。そしてまた帰るときには、「美味しかったです」「最高です」、と言って、給仕をしてくれる人、調理をしてくれる人に最大の礼儀を尽くすんだ。これが大事である。これが一流の欧米人の振る舞いである。」

そして先生は、

「いろいろな人間関係を見てきたけれども、結論として言えることは、「女は馬鹿で男はずるい」、ということである。要するに、女性は純粹だから、現実的だから、すぐ騙されちゃうんだ。これに対して、男はずるい。卑怯であり、嘘をつく、そしていざというときに逃げるのが男なんだ。私は、人生でいろいろな人を見てきたけれども、結局は、『女は馬鹿で男はずるい』、これに尽きるな。女性は賢明にならなければいけない。」と強調されております。

なお、女性が賢明になるためには、前述しましたように、哲学をもつこと、良い先輩をもつこと、決して一時の同情とか感情とかに引きづられてはいけないという、ことです。

先生は、「結婚の条件」ということについてもお話してくださいました。「いろいろあるだろうけれども、女性が男性を選ぶ場合の結婚の条件は、第一条件は、経済力である。第二番目が、誠実かどうか。人柄。三番目が、仕事に対して熱心かどうか。最後は、信念である。信念があるかどうか。」と言われました。よく女性にとっての結婚の条件に、愛情とか、優しい人とか、そう言うけれども、そんなものは三日で終わってしまいます。いわゆる長持ちする結婚の条件というのは、女性が不幸にならないためには、まずは男性の経済力、それから人柄、仕事、そして信念、こういうところを見ていくことが大切であると思います。

さきほどの建物の話ではありませんけれども、先生は青年に、「私は君たちを木曾義仲にしたいくないんだ」と言われたことがあります。

木曾義仲、すなわち、あの木曾の山奥から出てきて天下を盗ろうと京都に行ったのです。そして京都の貴族たちの生活、その煌びやかな生き方に目が眩んでしまった。貴族たちと全く同じような生き方をしようと真似をしました。貴族たちから木曾義仲は馬鹿にされるわけです。あの木曾の山猿め、というように馬鹿にされて、最後は、木曾義仲は滅びてしまうのです。

先生は青年たちに、「私は君たちを木曾義仲にしたいくない。本物にしたいんだ。どこにいても物怖じしない、堂々と振舞えるような、そういう一流の風格、一流の人格、そういうものをそなえさせてあげたいんだ。」このように先生は言われました。

木曾義仲になってはいけない。田舎者の成り上りみたいな、成金みたいな、そういうみっともない者になってはいけない。いつどこに出ても、堂々たる人格、振舞い、そういうことができるような人間にしたいんだと。先生は言ってくださいました。

また、ある建物が出来た時の話です。そこで祝賀会が行われました。先生は、乾杯しよう、と言われた。そうしたら給仕をする若い女性の方々がビールの栓をパンパンと全部一斉に抜いちゃったんです。

すると先生は、「ビールの栓というのはいっぺんに全部抜いてはいけない。それには二つ理由がある。一つは、ビールの栓を早く抜いてしまうとビールの気が抜けちゃうじゃないか。ビールの旨みが無くなってしまう。一本一本、飲

む分量に合わせて栓を抜いていくんだ。それから二つ目には、もし飲まなかったら、もったいないじゃないか。」と注意されました。

そして、食事が始まった時だったんですけれども、先生は、自分が食事をしながらも常に場内の雰囲気、皆が楽しそうか、ゆっくり食事をしているか、そういうことを常に、さりげなく、気を配ってらっしゃるんです。その時、ある女性が襖を下の方を持って開けたんです。すると先生は、「襖は必ず取っ手をもつんだよ。必ず取っ手をもって開けるんだ。建物というのは一度汚してしまうと元に戻らないよ。だから大切に、使っていくんだ。」と細かいことですが、ピシ、と急所を教えてくださいました。

先生は大学に来るたびに、大学構内を歩きながら、「ゴミは、片付けなさい」と指摘されます。「ゴミを放置しておくところに虫が溜まるんだ。ゴミは決して放置してはいけない」と言われます。そして、どうしても年月が経つと壁に亀裂が走ったりしてしまうんですが、亀裂の入った壁には、「ここに額を掛けよう」「額をかけて線が見えないようにしなさい」と注意される。「不潔でいい、だらしなくていい、というのではいけない。常に綺麗に、常に清潔に保っておく。それが自分の生命を汚さないことになるのだ。常に自分の居るところ、自分の環境を綺麗に保っておくことが身心の上で大事なことなんだよ。」と先生は言われました。

九州に『西日本新聞』という新聞があります。今から数年前、その新聞社の社長以下、編集局長など5、6人が来まして、池田先生にインタビューをしたことがあります。

先生はインタビューが終わってから、「何か質問がありますか」と聞きました。すると一番末席にいた若い記者が、「池田先生。僕は今三十二歳です。池田先生が会長になられた歳と同じです。池田先生はそれ以来ずっと会長、名誉会長を務めてこられました、疲れたことはございませでしたか」という質問をしました。

すると先生は、「それは疲れますよ」、と言われながら、でも自分はどういう気持ちで世界のために、人々のために、地域のために、働いてきたか、というお話をされ、そういうことを考えてみると、疲れとかを感じさせないものです、という話を約一時間にわたって滔々と話されました。先生は、その一番若い記者に向かってざっくばらんに、話されたのです。

翌日、その記者は編集局長から呼ばれました。何事かと思っ行ってみると、池田名誉会長から君に色紙をいただいたよ、と。そこには、「今は無冠の小王、

いつかは無冠の帝王にと」、と書いてありました。その記者は本当に感動しました。「創価学会の名誉会長は、ここまで気配り、心配りをしてくれるのか」、ということで驚いたのです。先生の細かな配慮は、いつもこのように続きます。

特に先生は、子どもを大切にされる。子どもに大きな期待をかけておられるのです。ある時先生は、駐日イギリス大使と会見されました。イギリス大使に、「子育てのポイントは何でしょうか」と聞かれました。すると大使は、「二つあります。私が子どもに対して心がけていることは、一つは、子どもと話す時は必ず視線を同じにします。自分がしゃがむか、子どもを椅子に座らせるか、話す場合には必ず視線を同じにします。見下ろすようなことはしません。二番目は、子どもに、今日あったこと、今日どういう人と話をしたか、どのような仕事を私がしたか、たとえ子どもであろうと、私の毎日やっている業務の報告をしております」、と答えられました。

先生は、「非常に大事な視点ですね。子ども扱いせず、対等に向き合うことが重要だと思います」、と言われました。そして先生自らの教育観として、「一つには、子どもには広々としたところに連れていくことが必要です。すなわち海とか山とか、そうした広々としたものを見せることが大事です。もう一つは、いろいろな人に合わせることを肝要です。」このように先生は応じられたのです。

このように先生の、青年、学生、子どもに対する期待、また青年の礼儀のあり方、あるいは教育論、さまざまな観点にわたって、先生の話は続いてきたのです。

#### 4. 世界の見方に関すること

先生の世界観について紹介したいと思います。

何度も申し上げまして恐縮なんですけれども、私自身、池田先生からいろいろなお話を伺う機会をいただきました。その時に先生は、非常に楽しそうに、世界を見る眼について語っていただきました。それは次のようなものでした。「これからは「生命の世紀」になる。すなわち生命という問題に焦点があたっていく。21世紀は生命の世紀である。生命という問題を究明するのは、哲学もあるが、究極的には、医学と天文学なんだ。医学は、人間の生命を内側へと掘り下げていく。これが医学である。それに対して天文学というのは、一見生命

とは関係ないように見えるけれども、この人間生命が大宇宙に冥伏していく、その究極の姿を解明していくのは天文学である。戸田先生は「科学が進歩すればするほど、仏法の生命観が正しいことが証明される」と言って、いつも雄大な天文学の話をしてくださった。生命の問題を究めるためには、広い意味での医学と、それから外へ向かっての天文学、これが生命を解明していく一つの鍵になるんだ。だから私は生命論を展開し、そして世界中の、世界一流の天文学者と語らいを続けているんだよ。」こう先生は教えてくださいました。

そのうえで、具体的な国の見方についても、視点を述べてくださいました。「アメリカで一番になることが大事である。なぜならば、アメリカは世界の縮図なんだから。世界のあらゆる地域からアメリカへ、アメリカの大学へ、学びに来ている。世界の縮図である。だからアメリカで成功することが、世界的になる道なんだ。そこで私はアメリカ創価大学を創ったんだ。当分、アメリカの地位は揺るがない。このアメリカで勝利していくことが世界で勝つことになるんだよ。」このように先生は、アメリカという国の見方、アメリカに創価大学を創った意味を教えてくださいました。

次にイギリス。

先生は、「イギリスは、何ととっても教育の国だ。イギリスの教育に勝るものはない。イギリスの教育は紳士を作る。ジェントルマンを育成する。この紳士を育てるという意味でのイギリスの教育に勝るものはない。私の数々の名誉学位の授与のなかでも、グラスゴー大学での名誉博士号の授与式、あれは私にとって忘れられないものである。荘厳であった。実にイギリスは教育の大国だ。」と言われました。

三番目に、先生は、「次の時代のホシは中国だよ。中国、韓国なんだ。何ととっても中国、韓国は、日本にとって文化の恩人である。日中友好なくして日本の発展はない。中国を味方にしておかないと日本は衰退してしまう。この点が今非常に大事である。」と言われました。

日中友好なくして日本の発展はない。中国を味方にしておかないと日本は衰退してしまう。先生の信念は揺るぎません。

作家の井上靖さんと有吉佐和子さんが中国に行かれた時、中国の文豪郭沫若氏が井上靖と有吉佐和子という両文豪に、「池田先生を中国に招待したいんだが」、と言った。そうしたところ、両氏とも、「大賛成です。是非池田先生を中国にご招待ください」、と言いました。するとそこに列席していた中国のある大学教授が、「いや、創価学会の池田氏は右翼である。こういう見方があると

いうことを聞きましたが」と反対しました。

これを聞いた郭沫若氏は何と言ったか。「自分には右翼とか左翼とか、そういうことは関係ない。あれだけの庶民の心をつかんで組織化したことは偉大なことである。私は是非池田先生からその庶民の心をつかむ方法を教えていただきたいんだ。池田氏を是非中国にご招待しよう」と反論したんです。こういう経緯で、池田先生の中国招待への動きが大きく前進したのです。

右翼とか左翼とか、そんなことは関係ない。私には、あれだけの庶民の心をつかんで、組織化をしたという、その庶民の心をつかむ方法を池田先生から教えていただきたい、これが郭沫若氏の率直な願望でした。これこそ、先生への中国招待のポイントだったのです。

先生はこの話を有吉佐和子さんから聞いて、今でも中国というと、「郭沫若氏には本当にお世話になりました」と、言われるのです。

四番目に、ロシアの見かたです。「ロシアというのは北の備えだ。近代国家日本は常にロシアに脅かされてきた。とくに昭和20年8月9日、日ソ中立条約を破ってソ連は日本に侵攻した。こうした経緯もあって、日本人の心には、常に、ロシアは嫌いだ、ソ連は嫌いだ、という気持ちが強い。しかし、日本にとってロシアと仲良くしていくことは北の守り。とくに、宗教と共産主義の対話は文明的問題である。文明間対話だ。この意味においてロシアは重要である。大事なことは、日本人のロシア観を変えることである。そのために私は、旧ソ連の時代に、モスクワに仏教寺院を作ったかどうか、という提案をしたんだ。そうすれば、日本人の心がなごむ。そうして、私は日ソ友好、日露友好のために尽力してきた。日本を守るためにはロシアを絶対に敵にだけはいけない。ロシアとの友好を図ることが日本の最大の守りになる。日ソ友好、日露友好、これは非常に重要な問題である。」と言われております。

五番目に、フランス。「フランスは文化の大国である。だけど、フランス人は気難しい。利己主義で、個人主義が強すぎる。この文化の大国であるフランスと、そして利己主義で、エゴが強いフランスと、どうやって付き合っていくか。それは文化だ。高尚な文化的なもので接していくんだ。ここがポイントである。」

六番目に、ドイツです。「ドイツ、この国は質実剛健で日本と似ているところがある。こういう意味では、ドイツ人と日本人は意気投合しやすい面があるといえる。」

このように先生は、世界のいろいろな見かたを語ってくださったのです。そ

のなかで、最後に、あと二つ、簡単に紹介すると、ひとつは、「21世紀はアフリカの世紀」と言われております。皆さんも何回も聞かれたことと思います。

もうひとつは、「21世紀の宗教、その最大の宗教はイスラム教である。このイスラム教・イスラム圏とどうつき合っていくか。イスラムの人たちとどう接触していくか。これが一番大事なポイントとなる。だから私はテヘラニアン博士やインドネシアのワヒド大統領、さらにはヨルダンのハッサン皇太子など、そういうイスラム教の人たちと仲良く、手を組んでいるんだ。21世紀はイスラム教が焦点になる。」こう強調されておられます。

## 5. おわりに

アメリカにはじまって様々な国の見方を、私たちは池田先生から教えていただいておりますが、最後に三点お話をしておきたいと思います。

第一に、チュニジア共和国のことです。こう言っても皆さんはあまりピンとこないかもしれませんが、チュニジアといいますのは地中海の、イタリアのちょうど反対側にある国です。かつてカルタゴという都市がありました。

2009年4月、チュニジア共和国で「各宗教は平和と戦争の問題についてどう考えるか」という国際会議がありました。突然、池田先生にその会議への招待状がきました。いったい何故池田先生に招待状が来たんだろうか。関係者に聞いてみました。すると、チュニジアは文明間対話という問題に大変に関心を持っており、各宗教、各文明が戦争と平和についてどう考えているか率直に話し合おうというものでありました。

その会議を実質的に運営しているのは、エル・マナール大学というチュニジアきっての大学のファンタル博士という人物でした。ファンタル博士はある時友人から、池田先生とテヘラニアンの『二十一世紀の選択』という、いわゆる「テヘラニアン対談」のフランス語版をもらったのです。その本を読んで、池田先生の一つ一つの発言に非常に感動しました。先生の発言の一つ一つをノートに書き写し、先生の発言の一つ一つを胸に刻んだのです。

そうしたなか、この会議が開かれることになり、そこで世界の著名な学者に招待状を送ります。ファンタル博士は迷うことなく池田先生を是非この会議に呼びたいということで、先生に招待状を出されたのです。

もとより先生は遠くアフリカまで行く余裕はございませんでしたので、名代

として私と戸田記念国際平和研究所のウルバン所長がこの会議に出席しました。その会議に行って私は大変に驚きました。

会議は最初に世界の著名な学識者等100名ほどが一堂に会しての全体会議が行われました。全体会議が終わった後、3つのグループに分かれての分科会となって討議が進められました。その全体会議の冒頭にファンタル博士が「開会の言葉」を述べました。博士の開会の言葉の最後に、なんと博士は池田先生の言葉を引用して、文明間対話がいかに重要であるかについて話をしました。そして、博士が池田先生の言葉の一節を引用した時、なんと場内から盛大な拍手がわき起こりました。私はもうそれだけでびっくりいたしました。

その次に、来賓が祝辞を述べました。最後に、池田先生のメッセージ紹介です。私が池田先生のメッセージを代読し、それで全体会議は終わりました。私は、後で会議の運営者に、「池田先生のメッセージ紹介をよく全体会議の最後に入れてくれましたね」と聞きました。

その会議の関係者が言うには、「本当に不思議なんです」と。「こういう会議では本人が来ない場合には、メッセージは普通、紙で配られて終わってしまうとか、あるいは分科会で紹介されて終わってしまうものです。一国の元首とか国連の関係者などの場合は全体会議でメッセージを紹介することはありますけれども、一民間人のメッセージを全体会議で紹介することは、普通はありません。これもひとえに池田先生に対する評価の高さだと思います」とのことでした。

チュニジアというと、地中海の入り口、アフリカの玄関、アラブ文明とヨーロッパ文明の接点です。この世界文明の接点の地域においても池田先生の哲学、池田先生の手書かれた書籍がこのような形で評価されているのか、ということで私は感動いたしました。

第二に、このチュニジアで思い出すのは、かの有名な歴史学者、トインビー博士のことです。トインビー博士の歴史観の中心にあるのが「挑戦と応戦」という原理です。すなわち、世界の歴史は、挑戦があってそれに対する応戦があり、これを繰り返しながら発展してきた、という考え方です。実は、博士がこの歴史観を思いついたのは、チュニジアの地であったといわれています。

トインビー博士と池田先生の対談『二十一世紀への対話』についてではありますが、そのなかで二人は世界のあらゆる問題について話し合っておられます。私はこの対話を読んで大変に感銘したのですが、二人の対話は99パーセントまで話が一致している。結論は一致しているのです。ただ、三つの点について池

田先生とトインビー博士との見解が違っている。

その一つは、自殺を認めるか認めないか。トインビー博士は自殺を認める。自己決定権、自分で自らを決定する権利があるということで自殺を認めておられる。それに対して、池田先生は、仏法の生命観のうえから自殺は認めません。これが対立点の一つ。二つ目は、安楽死の問題。もう病気は治らない。もう楽に殺してくれ、と患者は言う。この安楽死を認めるかどうか、これについてトインビー博士は、認める。これに対して池田先生は、認めてはならない。どんなことがあっても人間は生き延びねばならない。この安楽死をめぐる問題でトインビーは賛成、池田先生は反対です。

三番目は、今後の世界の動向について。トインビー博士は、「今後世界は中国を中心に世界政府のようなものができていく」というように、大変に高い評価を中国に与えます。それに対して池田先生は、「中国の存在が大きくなることは否定できないけれども、中国一国を頂点として世界の秩序ができることはありません。これからはEUとか北米自由貿易協定とか、あるいはアジア太平洋経済協力会議とか、そうした地域的な連合が折り重なって世界の秩序ができていきます」というのです。

トインビー博士の、「中国を中心として世界の秩序ができていく」という考えに対し、先生は、「地域統合が積み重なって世界秩序ができていく」という見かたを展開されておられます。この三点が池田先生とトインビー博士の見解が違う点でしたが本当に示唆に富む、世界を動かす対話です。

第三に、駐日全権中国大使である程永華さんのことについてお話したい。それは忘れもしない昭和50年4月7日のことです。

当時中国は日中国交回復して初めての留学生を日本に送りたいと考えておりました。その時、東大、早稲田、すべて受け入れを断りました。中国の駐日大使は大変に困って池田先生に相談しました。池田先生は、「もし創価大学でなければお引き受けいたしましょう。私はその6人の留学生の身元保証人になります」。こう先生は言われて、6人の中国留学生が創価大学に入学してきました。

昭和50年4月7日の夜。あの創大の滝山寮に6人の中国留学生が入寮してきた時、先生は初めて寮生の会合に出られました。そして次のような挨拶をされました。

「私が正式に寮に来るのは今日が初めてです。それは、中日友好のため、中国の将来の指導者6人の友人を迎える歴史的な日となるのでお邪魔したのです。

21世紀の毛沢東主席の後継の方に申し上げたい。8億の人民のなかで、最も優秀で、選ばれて、世々代々、中日友好、世界平和のために偉大なる使命を帯びて来られた方々、どうか身体を大切に、日本語、日本文化の習得のために、挑戦してください。また、6人の留学生を迎える創大生の皆さん、どうかこの6人の友人と、一生涯手を携えて、絆を深めて歩んでください。今日の日を記念して、周総理が日本を去った時、満開であった桜の木を創大構内に植えたい。また6人の留学生の桜も植えたい。

ともあれ、「浅きを去って深きに就くのは丈夫の心」です。日本の学生は一般に、浅きに就いてエゴになってしまった。何のために大学に入ったのか。何のために知識を学ぶのか。その目的を忘れてしまっています。

「丈夫の心」とは革命です。人民のため、社会のため、学んで知識を身につけ、どのように社会に貢献するかが大事です。「丈夫の心」だけは持ってください。私は、犠牲になって、皆さん方の道をこれから作っていきます。

どうか留学生、創大生の皆さん。日本の平和、アジアの平和のために、日中の絆を深めながら、堂々と進んでいってください。ある時は笑い、ある時は泣きながら、しかし汗を流しながら、青春の黄金の道を歩いていってください。自分自身に負けない「丈夫の心」を持ちながら、革命児になってください。これからの6人と創大寮生の心からの絆を願って、私は今日、寮にお邪魔しました。」

このように先生は当時の寮生に話をしてくださいました。

そして6人の留学生を、先生は大学に来るたびに、呼ばれて、「何か困ったことはありませんか」「不自由していることはありませんか」と聞かれました。すき焼きを食べたり、「日本語は難しいですよ。これは普通、『水』というのですが、『お冷や』ともいうんです。でも僕は江戸っ子だから『おしや』になってしまうんです。『ひ』と『し』が江戸っ子には言えないです。日本語にはこういう難しい面もあります。どうかこの難しい日本語、日本文化をしっかり理解してください」、と言って、心からこの6人の留学生を先生は育てられた。その6人のうちの一人である程永華さんが中国大使として日本に赴任されているのです。

2010年5月、中国清華大学の名誉学位を池田先生が受けられる時、程永華さんは来賓としてその式典に出られました。直前まで大使として中国語で挨拶をする予定でした。大使という公的な立場では母国語でなければ話をしてはいけないのです。それを程永華さんは自分の挨拶のとき、突然、「自分は創価大学

の卒業生です。今日は創立者池田先生がおられますので、自分の日本語を試してもらうために日本語で話します」と言って、日本語でスピーチをされたのです。

私は後で中国の関係者に、大使があのような公けの席上、日本語で話しているのですか、と聞きました。その人は、「本当はいけません。でも二つの理由から許されるでしょう。一つは、大使が創価大学の卒業生であること。もう一つは、池田先生の前だからです。池田先生のためならば、中国は、何をやっても許すでしょう」、とその中国関係者は答えておられました。それほど池田先生に対する中国の信頼は厚いのです。

まだまだ話し足りない点がありますが、この偉大な池田先生の哲学、思想を私たちは、あらゆるところで語り、語り継ぎ、人生の、そしてこれからの世界の指針としてまいりたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。